刊行はいまだ例がなく，本書刊行の意義は大きい．著者の労を多とすると共に本書の刊行に心からの拍手を贈りたい．（千原光雄）

□能登谷正浩（編著）：**海苔の生物学** 4 pls.+1-3+172 pp. 2000. 成山堂．¥2,800（税別）．

アサクサノリの仲間（アマノリ属 *Porphyra*）が貝殻の中をトンネルのような穴を掘りカビのような糸状体で夏の高温時期を過ごす *Conchocelis*-phase（コンコセリス相）の発見（Drew 1949）は，温度と日長時間をコントロールして室内培養を行えば，必要に応じていつでも実験材料としてノリ葉状体を得ることを可能にしてくれた．爾来ノリの生物学は長足の進歩を遂げ，その成果はノリ栽培技術に取り入れられ，戦後年間10億枚にも満たなかった日本のノリ生産高は現在では100億枚に達し，かつて略奪農業的であったノリ栽培はタネ（胞子）を蒔いて育てて収穫する近代的農業へと変貌した．

ノリの生物学に関して一つ言えることは，研究は常に栽培技術の改良及び新品種の作出と深い関わりをもって歩んできた事実である．それは陸上植物で言えばイネの研究に比肩できよう．本書の編著者・能登谷博士はアマノリを対象とするこのような学問を「アマノリ学 Porphyrology」と呼ぶことを提案している．

本書は最近のノリ生物学の研究がどのように展開しているか，それはどのような目標をもって進められているのかなどを，I．種の生物学，II．育種，III．有用成分の3部に分けて解説する．I部には種の分類，繁殖様式，DNAによる野生種と養殖種，生長と細胞分化，韓国産とその分布，絶滅危惧種の6章，II部には組織培養による育種，選抜育種，細胞融合による育種の3章，III部にはアミノ酸・ビタミン・ミネラル，糖質，揮発成分の3章が扱われる．執筆は各分野の第一線で活躍の15名による．最近急速に進展し，かつ多様化したアマノリ属を対象とする研究の概要を知るのに好個の書である．（千原光雄）

□山本紀夫，稲村哲也（編著）：**ヒマラヤの環境誌　山岳地域の自然とシェルパの世界** 335＋16 pp. 2000. 八坂書房．¥4,500（税別）．

編著の山本氏が中心となって1994年から3年間にわたり，‘ヒマラヤにおける環境と人間との関係’が文部省科学研究費により組織され，実施された．この現地調査は，その後国立民族学博物館で行われた共同研究‘ヒマラヤ高地における環境利用の民族学的研究’（代表: 山本紀夫）で，さらに解析・統合され，本書に記されるような成果を生んだ．本書のもととなったのは‘季刊民族学’に連載されたその研究報告である．環境誌とは聞きなれない言葉であるが，編者によれば単なる自然誌でも文化誌でもなく，自然と文化をともに含みこんだものであり，それは環境に焦点をあて，それと人間との関係をさまざまな視点から総合的に解明しようとした試みである，という．興味深い論考が多いが，中でも岩田修二氏のヒマラヤとその成り立ちと影響や山本紀夫・土屋和三両氏による多様な植生や半栽培植物への論考は本誌の読者にとってとくに参考になるであろう．本書で解析されている問題は，私自身野外調査で出会ったこともあり，その理解の新鮮さには目を開かされるものも多い．ただ，実際のデータと照らして，理屈が先走りしていると思わざるを得ないところもあるが，これは新しいアプローチにはままあることではある．（大場秀章）